

第 8 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入賞作文集



(北方領土青少年等現地視察支援事業)

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目 次

1	発刊にあたって	-----	1
2	実施要項	-----	2
3	選考について	-----	3
4	入賞者一覧	-----	4
5	授賞式風景	-----	6
6	入賞作文	-----	7

最優秀賞

京都府知事賞	大山崎町立大山崎中学校	浅野	陽香
京都市長賞	京都市立伏見中学校	岡嶋	良太郎

優秀賞

京都府教育委員会教育長賞	京都府立須知高等学校	林	沙紀
京都市教育委員会教育長賞	京都市立嵯峨中学校	黒田	紗季
北方領土問題対策協会理事長賞	南丹市立園部中学校	湯浅	明日佳
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立伏見中学校	宮北	皓太
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都府立鳥羽高等学校	吉富	優太
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立嵯峨中学校	小林	尚子
京都新聞社賞	宮津市立宮津中学校	森	恵美
京都新聞社賞	京都市立開晴中学校	上野	鈴葉
KBS京都賞	亀岡市立南桑中学校	山口	夏穂里
KBS京都賞	京都市立烏丸中学校	朝尾	由菜

佳作	京都市立月輪中学校	白須	菜々子
佳作	京都市立西京高等学校		
	附属中学校	田中	萌望
佳作	京都市立嵯峨中学校	大久保	美鈴
佳作	京都市立伏見中学校	松家	純
佳作	京都市立嵯峨中学校	老家	初果
佳作	大山崎町立大山崎中学校	山田	緑
佳作	宮津市立日置中学校	佐瀬	千晶
佳作	京都府立園部高等学校		
	附属中学校	山内	早希
佳作	京都府立鳥羽高等学校	由良	萌々花
佳作	京都府立須知高等学校	上林	拓未

発刊に当たって

「北方領土と私たち」作文コンクールも、本年度で第8回を迎えることができました。選考基準の一つとして、まず「正しい理解や認識」をあげていますが、当初は、北方領土問題を正しく理解しているかどうかに関わる作文が多く、この基準に合致するような作文を選考することに主眼を置いていたように記憶しています。

しかし、回を重ねるにしたがって、選考基準の二つ目の「関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとするもの」(現に、授業で学んだことなどから、自分でインターネット等で調べたり、資料を取り寄せたりしている作品が目立つようになってきています)、あるいは、選考基準の三つ目の「解決に向けて自分にできることを考え、実践していこうとしているようなもの」まで出てきています。このことは、現在の作文コンクールの最終的な目標であると捉えており、そこまで、生徒たちの意識は高まりつつあります。

今回は、千七百四十部の応募数があり、昨年に比べ三百部余り増加しています。同じ生徒の応募もありますが、毎年千人以上の京都府内の生徒たちが、コンクールに応募してくれるというこの意義は、計り知れないくらい大きいと言えます。中には、作文の取組を通して家族の方等と北方領土や他の領土問題について語り合う生徒もいます。それはこの問題が生徒から家族へ、子どもから大人への広がりを通しており、応募数の何倍もの人たちがこの問題に関心を持つ事を意味しています。

一方では、北海道、わけても根室地域と近畿や京都とは、北方領土問題に対する意識や取組に温度差があるのも現実です。それは、深く関わっている地域から離れば離れるほど、この問題を、その地域の人たちだけのことであ

るかのように捉えるからだと思えます。しかし、沖縄の基地問題が沖縄の人たちだけの問題ではなく、日本や日本人全体の問題であるのと同じように、北方領土問題も日本人全体に関わる問題であり、作文コンクールに応募するほとんどの子どもたちがそのように捉えています。

ところで、京都府全体での作文コンクールへの取組状況を見てみますと、地域によって応募数にやや偏りがあります。今後、このような偏りをなくしていくことが、京都府内での温度差を解消していくことにつながるはずですが、

今後この取組を通して、子どもたちのパワーが地域社会、ひいては国をも動かす大きなうねりとなっていくよう発信できればと考えていますので、引き続きご支援いただきますようよろしくお願いいたします。

結びにあたり、応募していただいた生徒のみなさんや御指導いただいた各校先生方の深いご理解と温かいご支援に感謝申し上げますとともに、ご後援いただきました独立行政法人北方領土問題対策協会、京都府、京都市、京都府・京都市教育委員会、京都市・京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都新聞社、産経新聞社、KBS京都のみなさまをはじめ、関係のみなさまに厚くお礼申し上げます、発刊の言葉とさせていただきます。

平成二十六年二月八日

北方領土返還要求京都府民会議

会長 多賀久雄

京都府北方領土教育者会議
会長 西田三郎

平成25年度

第8回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

- 1 趣 旨 京都の中学生や高校生が、北方四島の現実に関心を高め、北方四島が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。
- 2 主 催 北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議
- 3 後 援 京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会
京都府中学校長会・京都市中学校長会・京都府公立高等学校長会
京都府市町村教育委員会連合会
(独立行政法人)北方領土問題対策協会
京都新聞社・産経新聞京都総局・KBS京都
- 4 テーマ 「北方領土と私たち」にかかわる内容であること(題名は自由)
- 5 募 集 (1) 対 象 京都府内の中学校・高等学校に在学している者
(2) 募集締切 平成25年12月6日(金)
(3) 作品規定 原稿用紙(400字詰)3枚以内
(4) 応募先 京都府北方領土教育者会議事務局
〒622-0051 南丹市園部町横田3-51
南丹市立園部中学校内 小森宛 TEL 0771-62-0222
- 6 審 査 主催者において選定した審査員により審査
- 7 表 彰 (1) 賞の設定
最優秀賞 2点・京都府知事賞・京都市長賞 各1点
優 秀 賞 10点・京都府教育委員会教育長賞 1点
・京都市教育委員会教育長賞 1点
・北方領土問題対策協会理事長賞 2点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞 2点
・京都新聞社賞 2点
・KBS京都賞 2点
入選・佳作 若干点
(2) 表彰式
平成26年2月上旬
(北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定)
- 8 その他 ・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。

問い合わせ先	京都府北方領土教育者会議事務局 (南丹市立園部中学校内 小森 誠)
	0771-62-0222

第8回「北方領土と私たち」作文コンクールの選考について

1 応募の状況

応募校	18校	応募点数	1,740点
-----	-----	------	--------

2 選考委員と選考基準

(1) 選考委員会の構成

氏名	所属・役職
松本和久	京都府北方領土教育者会議顧問 (京都府立須知高等学校校長)
西田三郎	京都府北方領土教育者会議会長 (南丹市立園部中学校校長)
宮田功	京都府北方領土教育者会議副会長 (京都市立嵯峨中学校教頭)
小森誠	京都府北方領土教育者会議事務局長 (南丹市立園部中学校教頭)
奥村光太郎	京都府北方領土教育者会議事務局次長 (京都市立伏見中学校教諭)
島本由紀	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市教育委員会学校教育課統括主席指導主事)
福森徹也	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市立月輪中学校主幹教諭)
能登英夫	北方領土返還要求京都府民会議副会長
野村啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
古川博規	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
土淵誠	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

(2) 選考基準

- ・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
(正しい認識・理解の視点)
- ・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
(主体的な態度・関心・意欲の視点)
- ・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
(将来への展望の視点)
- ・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
(啓発資料としての価値の視点)

3 選考の結果

- ・別紙の入賞者一覧のとおり

4 選考を終えて

- ・このコンクールも8回目を迎え、府内の中学校・高等学校にもかなり定着した感があるが、今後は応募いただく学校数をさらに増やす取組が必要である。
- ・作文の内容をみると、最近の領土問題に関わる報道や北方領土問題について学習した内容を多様な感性でとらえ、自分の意見を明確に表したものが多く見られ、北方領土問題に対する理解の広がり、深まりがうかがえた。
- ・この課題に積極的に取り組み、指導いただいた各校の先生方に深く感謝したい。

第8回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

氏 名	学 校 名	学 年
最優秀賞（京都府知事賞）		
浅野 陽香	大山崎町立大山崎中学校	1年
最優秀賞（京都市長賞）		
岡嶋 良太郎	京都市立伏見中学校	3年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
林 沙紀	京都府立須知高等学校	3年
優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）		
黒田 紗季	京都市立嵯峨中学校	2年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
湯浅 明日佳	南丹市立園部中学校	2年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
宮北 皓太	京都市立伏見中学校	3年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
吉富 優太	京都府立鳥羽高等学校	1年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
小林 尚子	京都市立嵯峨中学校	2年
優秀賞（京都新聞社賞）		
森 恵美	宮津市立宮津中学校	3年
優秀賞（京都新聞社賞）		
上野 鈴葉	京都市立開晴中学校	3年
優秀賞（KBS京都賞）		
山口 夏穂里	亀岡市立南桑中学校	3年
優秀賞（KBS京都賞）		
朝尾 由菜	京都市立烏丸中学校	3年

第8回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏 名	学 校	学 年
佳 作	白 須 菜々子	京都市立月輪中学校	3 年
	田 中 萌 望	京都市立西京高等学校附属中学校	2 年
	大久保 美 鈴	京都市立嵯峨中学校	3 年
	松 家 純	京都市立伏見中学校	3 年
	老 家 初 果	京都市立嵯峨中学校	1 年
	山 田 緑	大山崎町立大山崎中学校	1 年
	佐 瀬 千 晶	宮津市立日置中学校	3 年
	山 内 早 希	京都府立園部高等学校附属中学校	3 年
	由 良 萌々花	京都府立鳥羽高等学校	1 年
	上 林 拓 未	京都府立須知高等学校	2 年
入 選	中 井 志	京都市立月輪中学校	3 年
	米 澤 脩 助	京都市立西京高等学校附属中学校	2 年
	西 井 京 香	京都市立嵯峨中学校	3 年
	福 嶋 優 衣	京都市立伏見中学校	3 年
	安 田 奈 未	京都市立開晴中学校	3 年
	矢 野 梓	南丹市立園部中学校	1 年
	吉 田 美 耶	南丹市立殿田中学校	3 年
	小 籾 海 渡	宮津市立養老中学校	3 年
	大 江 麗	与謝野町宮津市中学校組合立橋立中学校	2 年
	遠 藤 ゆ ら	京都府立須知高等学校	1 年

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

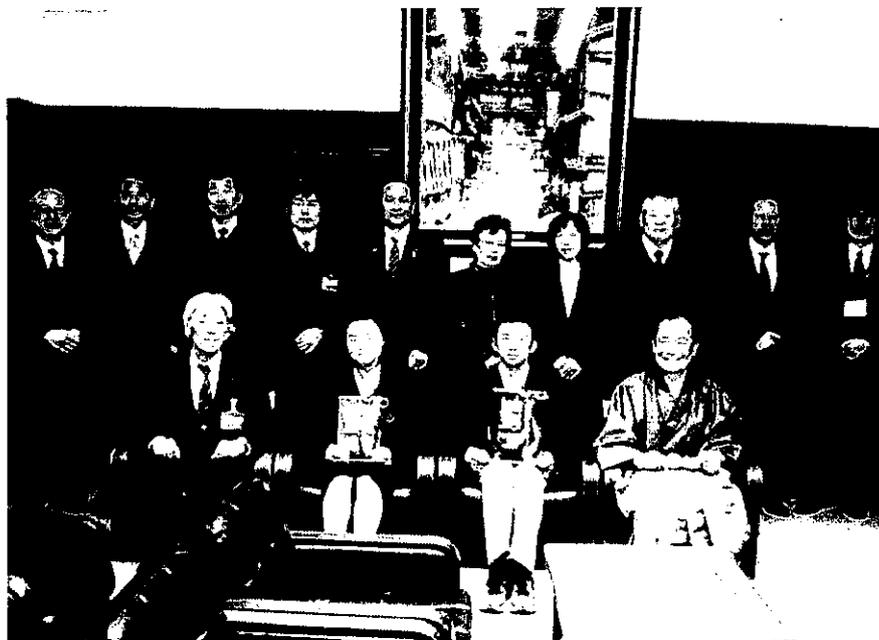
平成26年1月22日 京都府庁



山田啓二京都府知事、小田垣 勉京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育委員会教育長賞の授賞式

平成26年1月22日 京都市役所



門川大作京都市長、生田義久京都市教育委員会教育長から賞状が授与されました。

入賞作文

最優秀賞（京都府知事賞）

北方領土に学ぶ

大山崎町立大山崎中学校

一年 浅野 陽香

「北方領土問題のこと、どう思う？」
私は父に、唐突な質問をぶつけてみた。
「たぶん、もう日本には戻ってこないよ。相手の立場に
たつて考えてごらん。」

この問題について全く無知な私に返ってきた言葉は、予
想外の後ろ向きな一言でした。

そこで、私はまず北方領土問題のことを理解するため
に詳しく調べてみることにしました。そこからわかった
事実は、江戸時代以降、北方領土はずっと日本固有の領
土であるということ。第二次世界大戦後、ソ連に不法占
拠されたということ。かつてそこには一万人以上の日本
人が暮らしていたということ。そして今は、多くのロシア
人が暮らしているということ。また、この問題の解決を
果たそうと現在に至るまで二十年以上の間、両国首脳
が交渉を続けているということ。これらの事実を知り、
私は少しでも早く、北方領土をロシアから取り返さ
なければいけないと強く思いました。

では、父が言った「相手の立場」とは、一体どういう
事なのでしょうか。深く考えてみると二つのことが思い
浮かんできました。一つ目は、現在のこの四島に住む多く
のロシア人家族の平和で幸せな暮らしです。そこが日本
の領土に戻るといふことは、かつて日本人が辛い経験をし
たのと同じように、彼らの故郷を奪ってしまうのでは

ないかという疑問にたどりつきます。二つ目は、国を動
かすロシア政府の人たちの置かれた立場です。北方領土
を手放すといふことは、せっかく手に入れた利権を失っ
てしまうことになります。国民の信頼を受け持ち、国の
利益や人々を守る責任がある彼らにとって、それは決して
容易なことではないと思います。

これらの二つの立場から眺めてみると、北方領土問題
を解決することの難しさに改めて気づかされています。
日本とロシアの国民が、お互いに理解を深め合うだけで
は、この問題は解決しません。北方領土の返還を実現で
きるとすれば、ロシア政府が国民の大多数から了承を得
るか、あるいは北方領土に代わる何らかの見返りを示す
ことが求められると思います。父が初めに言った一言は、
もし仮に日本が逆の立場であったとしても、同じ様な道
をたどるであろうということの意味していたのかもしれ
ません。

それでも私は、問題解決への希望があることを信じた
いです。中国や韓国と争っている尖閣諸島や竹島とは異
なり、領土問題の存在を認め合い、互いにとって最良の
形で解決を図ろうと努力する両国の姿がそこには感じら
れるからです。この先どんなに時間がかかろうとも、私
たちはこの希望の光を消してしまわないよう、過去に学
び、未来につなげていくことが大切です。そのためには、
この問題の発端となった戦争の過ちを知り、二度と新た
な領土問題を起こさないようにすることが、私たち若い
世代に託された役割・責任であるのだと考えます。

最優秀賞（京都市長賞）

世論調査から見た北方領土問題

京都市立伏見中学校
三年 岡嶋良太郎

「北方領土返還要求運動に参加したくない人 五十九・五％」。これは今年の十一月に日本政府が発表した世論調査の結果である。私はこのデータを見て大きなショックを受けた。なぜならば、このデータによれば、日本国民の約六十％が北方領土返還要求運動に拒否反応を示しているからである。これはいったいどうしたことだろう。北方領土の返還を要求することに何か問題があるとしても言うのだから。私は国民の多くが北方領土返還要求運動に賛同していると確信していた。そして返還を求める国民の強い意思を背景に、政府はロシアとの交渉に臨んでいると理解していた。しかしこのデータを見ると、北方領土の返還を要求することに、国民は興味をもっていないのではないかとさえ思ってしまう。

そこで、次のことを最低限の歴史的事実として確認しておきたい。①北方領土は太平洋戦争が終わった後に当時のソ連に武力で奪われた日本固有の領土である。②そして今なおロシアに不法占拠されている島々である。③また、当時島を追い出された日本人が帰還を熱望しているところでもある。

つまり北方領土の返還を要求することは、日本人にとって正義の実現を追求することであり、そこには一点の誤りもないということなのである。このことを理解すれば、多くの国民が北方領土返還要求運動に積極的に参加

してくれるはずである。

それでは北方領土問題に対する理解を深めるためには一体どうすればよいのだろうか。私はまず学校が北方領土教育に積極的に取り組むことが大切であると考える。なぜならば、先の世論調査によれば学校教育を通じて北方領土問題を知った人は二十七％に過ぎないからである。確かに塾で別の学校に通っている友人に北方領土の話をする、怪訝な顔をされることが多い。

私たちの学校では、年に一度北方領土に関する学習に取り組んでいる。私はその学習を通じて北方領土問題を詳しく学び、北方領土の返還を強く求めるべきだという意識を持つようになった。このような取組を多くの学校に広げていくべきである。

北方領土の返還は、外国であるロシアとの交渉によって実現させるものである。ロシアに返還を決断させる力ギとなるものは、北方領土問題に対する日本国民の深い理解と返還を求める熱い思いに他ならない。先に取り上げた世論調査程度の数値では、ロシアに足元を見透かさされるだけである。これでは北方領土は返ってこない。私たちは「北方領土返還要求運動に参加したい人」の割合を増やす必要がある。それが返還を実現する大きな力になるからである。私の力は微力である。しかし私は多くの人に北方領土問題を繰り返し語りかけ、返還要求運動の輪を広げていこうと決意している。

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

北方領土問題は、時間とのたたかい

京都府立須知高等学校

三年 林 沙紀

「北方領土問題は、時間とのたたかい。」
私の北方領土問題に対する認識の到達点です。そう思ったのは、この夏に根室で実施された少年少女現地研修会に参加し、二つの事実を知ったからです。

その一つは、現在、北方四島ではロシアの若い世代が次々に移り住み、その子ども世代も多く生まれているという事実です。この事実は、今後時間が経過すればするほど、北方四島のロシア化が一層進み、返還を難しくする状況が生まれるということです。この事実は、私にとつては思いもしない意外なことでした。過疎化や高齢化に苦しむ日本とは対照的です。また近年、病院、学校、道路、港湾など社会インフラの整備も急ピッチで進められていくと聞きます。このように北方四島では、現在急速なロシア化が進んでいるという見過ごしにできない状況にあると感じました。

二つ目は、旧ソ連による北方四島の不法占拠からすでに六十年以上が経過し、元島民の皆さんの高齢化が進み、その方々にとって残された時間は多くないという事実です。旧ソ連による北方四島の不法占拠の生き証人とも言える元島民の皆さんの存在が、これまでの北方領土返還運動の原動力でもあったのです。

このように、北方四島のロシア化と世代の若返りという既成事実の進行に対し、元島民の皆さんの高齢化は止

めようもないという現実の重みを深刻に受けとめなければと感じました。今、北方領土問題を考える時、この「時間とのたたかい」という課題を直視しなければなりません。

しかしながら、問題の解決を急ぐあまり強引な解決方法はふさわしくありません。いかに不法占拠されている北方領土とはいえ、尖閣諸島や南シナ海で行われているような乱暴なやり方をとるべきではありません。北方四島に暮らしている現地ロシア人の問題を納得できるように解決し、また北方海域を尖閣諸島のように緊張化させない、平和的で恒久的な解決に導く必要があります。幸いにも日口両政府が、北方領土問題を互いに解決すべき問題と合意していることは重要です。

では、北方領土問題を一日も早く、しかも平和的に解決することは、どうすればできるのでしょうか。遠回りのようであっても、まずは、日本国民である私たちが、北方領土問題について正しい知識と返還への熱意を高めることが、すべての基本だと考えます。国民一人一人が、北方四島は日本の領土であるという意識を高め、返還を求める世論をおこすことです。こうした国民世論の高まりこそ、政府をバックアップし、国際社会に私たちの切実な願いを届け、ロシアを動かす力となるに違いありません。

そう考えると、今求められている「時間とのたたかい」は、国民の意識を高めるための「時間とのたたかい」だといえます。「知ることが、四島返還の第一歩」。北方領土問題対策協会のパンフレットにあった標語です。国民一人一人が、正しい知識を持ち、北方四島返還への熱意を高めることが、一日も早い解決につながることを信じて、私にできることを精一杯取り組んでいきます。

優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

北方領土問題の解決にむけて

京都市立嵯峨中学校
二年 黒田 紗季

北方領土のことについて、私はあまり知らなかったし、興味もありませんでした。しかし、中学校の授業で北方領土がロシアによって、歴史的に見ておかしな形で占領されていることを知り、納得できない気持ちから、興味がわいたので詳しく調べてみました。

すると、北方領土は日本人が自分たちで開拓し、この地で多く住んでいたこと、第二次世界大戦終了直後、ソ連軍によって占領され、ソ連がロシアとなった今でも不法に占拠されていることがわかりました。私は、追い出されてしまった日本人がとてもかわいそうだと思いません。そして、一日でも早く追い出されてしまった方の「ふるさと」を返してほしいと思うようになりました。

しかし、北方領土は緯度のわりには温暖で自然環境が良く、豊かな生態系が残っていますし、漁業資源も豊富などころです。だから、ロシアはそう簡単に返してはくれないでしょう。でも、何とかしなければならぬし、過去には戻れないので、今、自分たちにできることを考えてみました。

それは、「日本人の一人一人が北方領土のことについて、正しい知識をもつこと」と「何ができるのかを考えて実行すること」そして、「絶対に忘れないこと」だと私は考えるようになりました。

これらの思いについて、もう少し説明します。まず、

「一人一人が正しい知識をもつ」とは、北方領土のことについて知らなければ何もすることができません。この問題についての歴史や国際法をはじめ、社会情勢などをよく知っている人が多ければ多いほど、日本政府の北方領土に対する交渉力は強くなっていくと思うからです。次に、「考えて実行すること」ですが、知識をもつだけでは、何事においてもほとんど進展しないのは当然です。やはり、交渉を進めていくためには考え、実行することが大切でしょう。一人一人が自分に行うことができることを一杯に考えて実行すれば、より早く返還が実現すると思います。

最後に、「絶対に忘れない」は、北方領土が日本人の住める場所となるまでの時間がどんなに長くかかっても、また困難なことがあっても、みんなが強い思いをもち続け、あきらめることなく返還のための運動を続けることです。このような意思は、必ず返還とつながっていくでしょう。

北方領土は日本の大切な領土です。このことをロシア人だけでなく世界中の人にも理解してもらい、少しでも早く四島が日本に戻ってくることを願っています。そのためにも、「日本人の一人一人が北方領土のことについて、正しい知識をもつこと」・「何ができるのかを考えて実行すること」・「絶対に忘れないこと」を私はこれからもしつかりと意識していきますが、これらをみんなのものとしていきたいと思います。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

関心を持つ事から始めよう

南丹市立園部中学校
二年 湯浅明日佳

曇り空でしたが、納沙布岬から齒舞群島の一つである貝殻島の灯台が見えました。「こんなに近いところをロシアが占有しているんだ。」と感じ、同時に本来なら日本人が自由に行き来できる島だと気づきました。

第二次世界大戦末期、ソ連は日ソ中立条約に違反して対日参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に北方四島の全てを占領しました。当時四島にはソ連人は一人もおらず、日本人は四島全体で約一万七千人が住んでいましたが、ソ連は一方的に自国領に編入し、全ての日本人を強制退去させました。それ以降、今日に至るまでソ連・ロシアによる不法占拠が続いています。

一年前、社会科の授業で初めて北方領土問題について学習しました。その頃は尖閣諸島や竹島の領土問題なども新聞やテレビ等で連日報道されていましたが、ほとんど関心はありませんでした。しかし社会科の授業を通して様々な事実を知ることとなり、さらに調べるうちに「こんなにも理不尽な問題が、戦後約七十年経た今も未解決の状態であること」に憤りを感じるようになりました。

それから一年が過ぎ、今回の北方領土青少年等現地視察に参加する機会を得ました。北海道に到着してすぐに目に飛び込んできたのは「北方領土を返せ」という看板や登り旗でした。京都に住む私にとっては遠い領土問題でしたが、北海道の人たちにとってはとても身近な問題

であると改めて実感しました。このような思いを持ちながら、元島民の方のお話を聞きました。「戦争が終わってホッとしていたらロシア人が土足で侵入して驚いた。」「終戦から四ヶ月後の十二月に根室への決死の脱出。当時は一年もすれば島へ戻れると思っていた。」等、生々しい状況が伝わってきました。戦後七十年たった今も元島民の方たちにとっては終わっていない現実なのです。「島は俺たちの村があつて、家も船もあつて平和な暮らしもしていたところさ。身内の墓を残してきたんだ。早く帰りたい。」元島民の言葉です。先に見た貝殻島の灯台をこのように思いで見えおられたと思うと、この問題の重大さをさらに感じました。一年前の社会科の授業で関心を持つきっかけができた、今回の視察ではその関心が体験を通してさらに深まり身近なものとなりました。二月七日が北方領土の日であること、ビザなし交流で学んだこと等をもとに、私たち日本国民全員が北方領土についてもっとよく考えなければならぬと思えました。そして領土問題について正しく理解し、話し合うことが大切だと考えました。しかし話し合いだけでは解決できません。この問題は日本国民全員が協力しないと意味がありません。元島民の代わりに、次代を担う私たち若者が、少しでも積極的に返還活動に参加することが使命であると私は思います。無関心な人もまず関心を持つことから始めてみる。それがやがては人や地域をも動かす大きな力へと発展していくと信じています。

最後に嬉しいニュースが発表されました。「山本沖繩・北方担当大臣は、北方領土のインフラ整備の状況などを視察するため、現職の閣僚としてはおよそ八年ぶりに九月、国後島など北方領土を訪問する方針を固めました。……」今回の訪問を通じて、北方領土問題の解決に向けた日ロ両国の気運が高まることを祈っています。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

世界に北方領土問題を訴えよう

京都市立伏見中学校
三年 宮北 皓太

北方領土問題は、太平洋戦争が終わった後に当時のソ連が日本固有の領土である北方領土に侵攻したことから始まっている。そしてその時に行われた不法占拠は、ソ連が崩壊してロシアになった今でも続いている。このように考えると、北方領土問題は日本とロシアの二国間の問題であるかのように見える。しかし私は当時の連合国全体に責任があると考えている。なぜならば、ソ連は終戦の一週間前に日ソ中立条約を一方的に破棄しただけでなく、北方領土への侵攻も日本が降伏した後に行っているからである。また、ソ連は日本の降伏を定めたサンフランシスコ平和条約にも参加していない。つまり、ロシアが北方領土を占拠していることについては、国際法上何の根拠もないのである。

それでは、ソ連（現在のロシア）によって行われたこのような不当としか言いようのない歴史的事実は、世界に知られているのだろうか。残念ながらほとんど知られていない。私たちは北方領土問題を世界に知らせることに、その不当性を訴えていく必要がある。それは北方領土問題の解決を、正義を愛する世界の民主国家の協力を得て進めていくという事である。

では、私たちは具体的にどのような方法をとるべきなのだろうか。私はまず多くの言語によるパンフレットの制作から始めるべきだと考える。私が調べたところでは、

北方領土を説明するパンフレットは日本語、英語、ロシア語の三ヶ国語しか作られていない。日本の隣国である中国語版やハンブル版すらないのである。これでは世界を味方に付けることは不可能である。ドイツ語やフランス語といったヨーロッパの言語やアフリカ諸国の言語も含めて多くのパンフレットを発行し、世界に北方領土問題を知ってもらう必要がある。

次に考えたい手段はネットを利用した広報である。世界中のどの言語を使用しても検索エンジンから北方領土問題にたどり着けるような工夫が望ましい。必要であればバナー広告と提携するという方法も考えられる。

このような方法により、北方領土返還要求に対する世界の理解を深めるべきである。そしてもっとも大切なことは、世界の理解と支援を背景に、日本人自身が北方領土返還についての取組を積極的に進めるべきだということである。いくら世界に北方領土問題の解決を訴えても、日本人自身の意識が高まらなければ効果は乏しい。私たち自身が北方領土問題の解決に向けて全力を尽くしている姿もまた諸外国の理解と支援につながるはずである。

私は学校でも、家庭でも、友達との間でも北方領土問題を話題にして、世界の人々が返還要求運動に協力したくなるような日本にしたいと思っている。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

まずは正しい認識を

京都府立鳥羽高等学校
一年 吉富 優太

「北方領土」と聞いて、あなたは何を思うだろうか。多くの人がロシアに対する非難の気持ちを抱くであろう。もっと言えば、北方領土問題が多くの人に戦争の一種と認識されているのではないかと私は感じる。

昨今は、北方領土についてのニュースといえば、日ロ間の交渉が行われたという報道ばかりが見受けられ、解説者がロシアに苦言を呈するといった内容が繰り返し放送されているように感じる。これでは日本とロシアが領土争奪戦を繰り広げているとしか思われまいだろう。

しかし、北方領土問題はそのような単純なものではない。立派な人権問題なのだ。そこには住民が生活をしている。ロシアが日本の領土である北方四島を占領した際、二万人近くの日本人が本島へ強制的に還されたという。むろん彼らの家は奪われ人権は侵害された。さらに被害は日本在住の在日朝鮮人にまで及び、彼らは日本国籍を離脱していたため本島へ帰還することができず、樺太への移住を余儀なくされた。

この現実には、私は心を痛め、同時に疑問を感じた。なぜ今までこのようなことを全く知らなかったのだろうか。理由は私がしっかりと北方領土問題を理解していなかったからだ。学校で北方領土問題が扱われることはほとんどなかったのだ。ニュースの表面的な報道を鵜呑みにして、勝手に北方領土問題を戦争の一種と認識してし

まっていた。

私はニュースの報道内容が大ざっぱすぎると思う。「本日交渉が行われた」という事実のみを伝える報道だけでは、人々の誤解を生みかねない。私は北方領土問題を報道する際は、じっくりとその複雑な内容を解説することが大切だと思う。それも年に一回きりでは人々の心には残らないだろう。人々の正確な理解を得る努力を惜しまないでほしい。

また、ロシアを一方的に非難するのもよくない。なぜなら日本人が十分に理解していない北方領土問題を、ロシア人が理解しているとは思えないからだ。実効支配の現状さえ知らない人だっているかもしれない。だからロシアが悪いと決めつけて、それ以上考えないのではなく、北方領土問題を複雑な問題と捉え、日本人だけでなくロシア人や朝鮮人全てに関わる問題であることを認識し、鳥瞰的な視点で北方領土問題を見つめる必要があると思う。現状は政治的な側面ばかりを注目して、人権問題であることが伝わりにくくなっている。

私は先日、高校の講演会で在日朝鮮人の方の苦しみを知った。彼らは参政権を持つことができないためにもどかしい思いをしている。北方領土から日本本島へ帰還できずに、樺太へ移住させられた人達も同じ思いをしていないに違いない。

私たち日本人はこのことを反省し、北方領土問題は人権問題であると認識を改めなければならぬ。今すぐ閉鎖的で一辺倒な報道をやめて、北方領土問題は人権問題だという共通認識を広めていくべきだ。北方領土問題に関わるすべての人が北方領土問題を深く理解したときに初めて、解決への一歩が踏み出せると私は思う。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土問題について思うこと

京都市立嵯峨中学校
二年 小林 尚子

北方領土をめぐる問題について皆さん知っていますか。それは戦後六八年間解決されていない日本とロシアの領土問題です。

終戦後、ソ連は「日ソ中立条約」を一方的に破棄し、対日参戦した。終戦後の八月十八日には、千島列島への攻撃を開始し、九月五日には千島列島のみならず、北方四島をも不法占拠した。北方領土の国境は、一九世紀に結ばれたロシアとの条約でも、国際条約でも、ウルップ島と択捉島の間に引かれており、北方四島は日本の領土であった。

今年の夏、私は少女少女北方領土研修に参加した。その中で、当時の状況について話を聞いた。ソ連軍が襲撃した時、ずっと島に住んでいた女性が顔に泥をぬり、男性のフリをして生き延びた話や、命からがら小舟で逃げてきた話など、初めて聞くことばかりだった。中でも一番ショックだったのは、日本人のお墓が今でも北方領土にはあることだ。先祖代々、守ってきたお墓が放置され、荒れ果てているのに、自由にお参りにもいけない現状について、その人たちの気持ちに立って考えてほしい。そのお墓には、自分たちの両親が眠っているのだ。私は研修を受けて、北方領土問題に関する意識・知識が浅いことに気づいた。そしてこの問題の解決には、私を含めた国民全員の理解が必要だと強く思った。そのために、四

島返還に向けて、どのような課題があるかについて知っていかねばならないことを痛感した。

現在、北方領土には多くのロシア人が暮らしている。北方領土返還のためには、そのことも視野に入れなければならぬ。かつてソ連がしたように、現地の人を追い出すわけにはいかない。戦後六八年間に、固有の文化が形成されている。故郷をつぶすことは、当然やるべきではない。また、現地に住むロシア人がいるならば、そのまま返還されなくてもよいではないかと思うかもしれない。しかし、島には日本人が何年も前から生きてきた証があり、返還を待ち望む元島民の方々が大勢いる。その人たちの思いを、私たちは忘れてはいけない。北方領土は返還されるべきである。だが、ソ連軍が不法占拠したような不幸なことはできない。平和的な解決を望むが、何世代にも続く問題となつてはいけない。結論をすぐに出すことは難しい。だからこそ、私はここで提言したい。四島の日本の領有権が日本にあることを両国が認め、国籍を問わずロシア人も居住を認める。その上で、話し合いを続け、日本人が自国の領土として自由に行き来できる島を増やしていくという方法である。不満は残るが、何十年も具体的な解決法がないより、有効であると考える。両国の間では、北方領土に暮らす少女少女と日本人との文化交流も進んでいる。この交流をさらに進め、互いに思いやり、両国が仲良く解決できることを望む。

向き合うこと

宮津市立宮津中学校
三年 森 恵美

「領土問題」。

いったい日本はいくつ抱え、いつになれば解決できるのだろうか。その一つである北方領土問題では、ロシアが占領するのは大きな間違いだが、私は日本にも責任があると思う。もし時代を遡り、日本とロシアが戦争という無意味で何の価値もないものをしていかなかったら、両国にとって平和なままの状態が今でも維持されていたかもしれない。そして故郷に帰れない人達の悲しみは生まれなかったはずだ。

ところで、北方領土に対するロシア政府の対応はニュースで大きく取り上げられているが、日本政府のそれへの対応は毎回曖昧だと思う。なぜなら、その対応が日本の中だけにしか伝わらないという、とてもささやかなものの気がするからだ。そんなことでは相手にしつかり意志を伝えられない。でも私はそんなことを言える立場ではないと知った。今まで報道されてきたニュースに一切興味を示さず、日本と深い関わりのある問題にも、いっかどうにかなるだろうと、背を向け続けていたからだ。しかし、偶然目にしたニュースで、「北方領土は自分たちの領土」と言わんばかりのロシアの態度に腹が立った。また悔しさも感じ、私は少し北方領土問題に興味を持つようになった。その中で、北方領土について両国が対立する一方、互いに交流している事を知った。それは

「ビザなし交流」である。私はそれを知って、自分の考えに少し誤まりがあると思った。学校の授業で交流の様子を見たとき、両国の人達は笑顔だった。今まで私は、ロシアは一方的に領土を占領している悪者だと思っていたが、そこで見たロシアの人達は、日本人と互いの文化を交流しあい、日本人を尊重していた。全てのロシア人が占領して威張っていると思っていたが、そうではなかったのだ。これを知って考え方が少し変わった。以前は早く返還さえしてもらえれば良いと思ってた。でもそれは北方領土に住んでいるロシアの人達と今まで交流していた日本人との信頼がなくなってしまうかもしれない。というのも、ロシアの人達もその地は故郷であるから離れるとなれば絶対良い思いをしないからである。そういう問題が見えてきて、これはとても繊細な問題なのだと知った。一方が良くても、一方が悪かったら本当の解決ではないのだと。

こうして振り返ると、常識なことを知らない全く知らなかった自分がいた。それは恥ずかしい事だ。だが課題は分かった。もつと領土問題に関心を持つことだ。これは他のことにも言える。大人への階段を昇っている私たちがもう、子供だからと言い訳はできない。次に日本が抱える問題を背負うのは私たちなのだから。日本人として日本の問題をしっかりと理解し、きちんとした意見を持ち、それが皆にとって平等であるかなど慎重に考えなければならぬ。それが解決に導かれれば、そこに笑顔が待っているのかもしれないから。

優秀賞（京都新聞社賞）

私たちが考えるべきこと

京都市立開晴中学校
三年 上野 鈴葉

北方領土問題は、いつ解決するのだろうか、そう疑問に思う前に、私たちがまず考えなければならぬことがたくさんあると思う。

北方領土は日本固有の国土とされている。だが、今現在、北方領土はロシアによつて占領されている。それに對し、日本は返還を求めるも解決せず、今なお問題として残ったままになっている。私自身もこの領土問題について、決して簡単に解決できるようなことではないと感じた。北方領土があることで領海が広がり、漁獲量も増加するし、資源が豊富にとれることも期待できる。しかし、それが北方領土の貴重な自然環境の破壊につながることも考えられないことはない。北方領土を領有することあたっては責任が重要だと思う。自国のメリットだけでなく、北方領土の自然環境を守る責任を持つことを大切にすべきだと思う。それを互いの国が理解し合い、責任を高めていくことが、少しでもこの問題の解決に向かうはずだと私は思う。

北方領土に今住んでいるのはロシア人である。でも北方領土に元々住んでいたのは日本人である。ロシア（旧ソ連）は条約を一方的に破棄し、北方領土に侵攻したとされている。つまり、当時住んでいた人々は、育った地から離れることになったのである。北方領土から追い出された日本人が、どんな思いをしただろうか。きっと多

くが、つらく、悲しい思いをしたと思う。そんな日本人の住む日本だからこそ、この歴史について深く考え、それを伝えていくことが必要だと思う。私はこの歴史を知り、日本が北方領土の返還を求めている本当の理由が、少し分かった気がする。日本、ロシアの両国民が正しい歴史を知ることが、一人一人の北方領土に対する考え方を変え、より深く考えさせられる一つのきっかけとなるのではないかと思った。

北方領土問題が解決するまでには、まだまだ時間がかかると思う。けれど、その時間を縮める方法はたくさんある。北方領土は大切な領土。北方領土の歴史を、これから先どう伝えていくべきか。これが第一に重要である。私は考えた。同時に、北方領土が日本に帰ってきたとき、貴重な領土をどのようにして活用すべきかを考え、その責任を持つことも大事だと考えた。ここで考えた大切なことを、日本やロシアの人々をはじめ、世界中のいたるところへ伝えていきたい。そして私は、このように多くの人々がこの北方領土問題について目を向けてくれるような社会をつくりたい。そのため、これから北方領土のことをもっとたくさん学んで、世界に発信していきたい。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土問題

亀岡市立南桑中学校

三年 山口夏穂里

「昔の人に受けた恨みを、今の人に向けるべきではない。」

私は中国との領土問題を通して、そう思っていました。昔の人がやったことと今の人は関係ないではないかと、しかし、今回の北方領土問題の授業でこの私の気持ちは、大きく揺らぐこととなったのです。

授業で北方領土の魅力、豊富な水産資源、美しい自然等を知るにつれて、私のロシア政府に対する怒りは強くなりました。「日本の領土なのに何故、ロシアのものと言うのか。資源が欲しいだけじゃないのか。」というふうに。同時に、今住んでいるロシア人にも腹が立つてきました。「他国の土地を自国のものだと言い、よくも堂々と住めるなあ。早く出て行ってほしい。」さらにこんなことも思いました。「今、住んでいるロシア人の生活なんか関係ないんじゃないの。だって、昔、日本人だって理不尽に追いだされたやん。」と。そう考えたとき、「昔の人に受けた恨みを、今の人に向けるべきではない。」という私自身の考えが頭に浮かびました。「そうだ今のロシア人だって、何も悪くないじゃないか。だってこれは国どうしの問題であって、そんな甘いこと言っていたら北方領土がロシアのものになつてしまう。（ロシア人と日本人が楽しそうに交流しているのを見て）こんなに仲が良ければ、もうロシアのものでもいいんじゃない。」

ない。とつても楽しそうだし……。でも、国の問題だからそういう訳にも……。そうだ、悪いのはロシア政府だ。ルールを破ることは許されなことなんだ……。私の頭の中は領土問題と、私の倫理観とで混乱しました。領土は勿論返してほしいです。でも、ロシアとの関係も大切にしたいし、今住んでいるロシア人の生活を奪うようなこともしたくありません。欲張りかもしれませんが、これが理想だし、日本政府もこの理想になるべく近づけようと努力しているから、難しい問題なんだと思います。ロシアには、理解してもらえないように粘り強く説得を続け、北方領土に住むロシア人には、北方領土以外の場所でも新しい生活を送ってもらおう。家や資金はロシアや日本が協力して出す。これが、今のところ私が考えられる解決法です。ロシアの他にも、中国、韓国とも領土問題があります。それら全てが平和に解決できることを願います。決して、私たちや、ロシア、中国、韓国……いや、世界中の人々の心が荒廃しないように。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土と私の思い

京都市立烏丸中学校
三年 朝尾 由菜

私は、今年の夏に北方領土視察研修に参加しました。その中で、心に残っているのは一日目の二つのことです。一つめは宮谷内さんのお話です。宮谷内さんは元島民で、当時のことをたくさん話してくださいました。そのお話は、全てが驚きの連続でした。その中でも印象に残ったのは、ソ連兵の上陸時の話と、国後島を脱出された時の話です。

戦争が終わり、安心したところに、ソ連兵が上陸してきて、女の人は自ら髪を切り、顔に墨を塗り、男のような格好をしたと話されました。さらに、時計や指輪などを持っている人は全て没収されるなど、ソ連の一方的な占領に苦しまれたことがわかりました。

ソ連兵の目を盗んで脱出した体験は、自分たちが生活している中では、あり得ないことで、こんな経験をしなければならなかったことは、とても辛くて苦しい体験だし、怖いことだと思いました。

二つめは、納沙布岬へ行って実際に境界線を見たことです。北方領土は近くに見えているのに、日本の船は、境界線ぎりぎりの所で停泊していました。

私は、北方領土にはロシア人が住んでいて、日本にもやって来て、たくさんのお物を買ったりできることや、ビザなし交流もしていることを知りました。なのにどうして今だに何も解決できないのかと思いました。

この視察に行く前は全然知らなかった北方領土の問題

について、視察を終えた今では、すごく身近に感じられるようになりました。元島民の方の話や、根室市の副市長さんの話を聞いたり、実際に境界線を見たりして、日本の北方領土に対する思い、現在北方領土に住んでおられるロシアの人たちの思い、両方の思いを大切にしていかなければならないと思いました。

視察の途中、バスの中から外を見てみると、「返せ！！北方領土」と書かれた看板とともに、ロシア語で書かれた看板もありました。私が住む京都では、あまり見ないものでした。

北方領土のことについて、たくさんの方に知ってもらいたいので、「返せ！！北方領土」の看板を京都にも立てたりして、少しでも北方領土に関心をもってもらう機会を増やしてほしいです。私も、視察で感じたことを、話していきたいと思えます。そして、少しでも早くこの問題が解決することを願っています。

佳作

領土問題解決に向けて

京都市立月輪中学校
三年 白須菜々子

「北方領土問題」、この言葉を聞いてもなんとなくは知っているが、詳しく知らない人がほとんどだろう。それが領土問題の現実だ。私はこの領土問題解決に向けて三つのことが必要だと思う。

まず一つ目は、国民の一人一人の皆さんがこの問題を詳しく知り、理解することだ。最初に書いたように領土問題を詳しく知っている人は少ないと思う。昔、北方領土に住んでいた人はほとんどなくなってしまった。このままでは領土問題はなくなっていく一方だ。そこで、その人たちから北方領土についての話を聞き、語りつないでいくことが大切だと思う。そして、私たちもこのことを知らないといけないので他人事だと思っはいけないと思う。

次に二つ目は、粘り強く交渉を行っていくことが大切だと思う。コツコツと小さなことでも行動にしていくことで何かにつながっていくのではないだろうか。でも、北方領土を返してほしいという気持ちだけでそのまま口に出してはいけないと思う。この北方領土は今、ロシアの故郷でもある。昔、日本がロシアにされたように、北方領土を無理矢理奪ってそこに住む人を追い出すことは、ロシアの人々にされたことと同じようなことをしているということになると思う。日本とロシア両方の故郷である北方領土をどちらの国も納得できるようにするの

はとても難しい。だから何度もあきらめず、お互い話し合いをしなければならぬと思う。いろいろな方向から交渉を進めることが大切だ。

最後に三つ目は、現在北方領土に住んでいるロシアの人と交流をすることが必要だと思う。現地の人と交流することでもその人々の思いなどを知ることができると思う。日本とロシアそれぞれ北方領土についての考えも違うと思う。直接交流し、話し合ったりすることで日本とロシアがもっともつと友好的な関係を築くことができるのではないだろうか。まずは、お互いのこともしっかりと考え友好を深めていくことが問題解決への第一歩だと思う。

現在日本とロシアの両方の故郷となっている北方領土問題はとても複雑なものだ。しかし、どれだけ時間が経っても両国が納得できる結論をだしてほしい。そして、国民のみなさんがこの問題をきちんと理解して、北方領土は日本のものだと思っ自信を持って言えるようになってほしいと思う。自分たちも何かできることがないか探したい。

佳作

領土問題の解決策とは

京都市立西京高等学校附属中学校
二年 田中 萌望

みなさんは、北方領土という言葉を知っていますか。何かは知らなくても、聞いた事はあるのではないのでしょうか。簡潔に述べると、北方領土とはソ連軍が占領した日本の領土です。第二次世界大戦末期の一九四五年八月九日、ソ連は当時まだ有効だった「日ソ中立条約」を一方向的に破棄して、対日参戦しました。一九五一年に締結された「サンフランシスコ平和条約」では、北方領土が最終的にどこに帰属するのかまだ決められていません。この領土問題を解決するには三つの事がらが大切だと考えました。

まず一つ目は、戦争のように語り継いでいく事です。次世代へ繋げないと、北方領土の問題を知らない人が増加し、問題に触れる機会が減ってしまいます。よって問題解決から遠のくので、やはり、問題を投げ出さずにつつかり受けとめて引き継いでいく事は大切だと思います。

二つ目は、現地にいる方々との交流です。「交流」と言っても何をするのか？と思う方もいらっしゃると思います。私が考える交流は、現地の方の心境を聞く事です。自分が住んでいる島の所有国が分かっているか、さぞかし不安の事でしょう。ですから、現地の方々の思いを聞くだけでも、ヒントはいくつか見つかるのではないのでしょうか。

そして、最後の三つ目は、日本とロシア、互国の納得・理解です。これを述べた一番の理由は、争いになつてほしくないからです。互国の納得・理解を得るためにはまず、二つの国の国民に現状を知らせた上で、日本の国土である北方領土が不法占拠されているという事を伝えなければならぬと思います。これを伝えて、尚ロシア国民が納得してくれない場合は、いくらのお金を払う、日本の会社でのロシア人の雇用数を増やすなどの工夫をして、争いの種をまかずに北方領土を取り戻せたら本当にうれしいと思います。

このように、北方領土問題は、国際的かつ規模の大きい問題です。今、私たちにできる事は何か？と聞かれると、答えるのは難しいです。しかし、問題を知る、現状に対しての自分の意見を持つ、それだけでも一つの協力になると私は思います。もしかすると、あなたの意見が反映されて問題解決に繋がるかもしれないのです。

いま一度、北方領土問題について、自分ができる事を考えてみませんか？そこから尖閣諸島や竹島などの、日本が抱えているさまざま国際問題にまで視野を広げられたら良いと思います。世界の国々と良好な関係を築き、日本がこれから平和な国であり続ける事を、私は願っています。

納沙布岬にて思う

京都市立嵯峨中学校
三年 大久保美鈴

北方領土は近すぎる——納沙布岬からは、曇りにも関わらず、肉眼で北方領土の島々が見えた。この時、私は北方領土に今までにない身近さと共に、日本の領土が未だ返還されていないことへの理不尽さを強く感じた。

二〇一三年の夏、私は以前から参加したかった「北方領土視察事業」に参加し、北方領土は断固として日本の領土であることを再確認した。そして、一日も早い返還のためには、ロシアの人々との積極的な対話や文化の相互理解が欠かせないと強く感じた。

この事業でお会いした根室市の石垣副市長が「WIN・WINの関係」が大切だという話から、「双方ともに勝者の円満な」関係で解決することが必要だということに気づかされた。今までの私は、日本側の立場からこの問題を捉えていたのでこの話はとても印象に残った。

また元国後島民の宮谷内亮一さんの体験談も伺った。「いつになったら戦争が終わるのか。」そう私たちに訴えた宮谷内さんの思いに、インターネットや本では知り得ない、心に迫る強い衝撃を受けた。私たちには帰れる故郷やお墓がある。しかし、宮谷内さんたち元島民の方々にはない。そして、第二次世界大戦さえまだ終わっていないのである。そして最後に話されていた「返還運動は何も難しいことではない。署名することも運動だ。歴史やロシアの文化を勉強して、何が正しいのか、どうし

たら良いのかを考えてほしい。」
石垣副市長や宮谷内さんをはじめ、北方領土関連施設の方から、私は大きなものを受け取ったように思えた。それは次世代へのタスキであり、北方領土に一番近い場所からの返還への強い思いである。

北方領土はもはや日ロ双方の人々にとつての故郷となつてしまつていく。行政や法律の関係で厳しいかもしれないが、私が以前から返還後の北方領土を日ロ双方が住める場所にしても良いと考えている。北方領土内でのみ自由に暮らせて、本国へ渡る時にはビザを必要にするのである。石垣副市長も「現在、四島に住んでいるロシア人を七十年前の日本人と同じ目（強制排除）に遭わせるのは本意ではない。」と話されていた。その一方で、元島民の方には、「ロシアとの共存を望まない声もある。だがどちらにせよ、ロシアの人々と積極的な対話をしないことには始まらない。実際、日ロ間でビザなし交流が行われ、現地の人々との理解が進みつつある。こうした対話の機会が、この問題をより身近に感じ、ロシアの歴史や文化への理解を深めることが大切なのだ。相互理解によつて日ロ間の対話を後押しし、「WIN・WINの関係」による解決の道が近づいていくのだと思う。

返還まで、私たちの戦いは終わらない。本当の「戦後」を迎えるためにも、私はロシアへの理解を深めていきたいと思う。

佳作

北方領土を世界遺産に！

京都市立伏見中学校
三年 松家 純

私はこれまで北方領土問題にあまり関心がなかった。京都から遠いし、身近に感じる機会が少なかったからである。テレビや新聞での扱いも、尖閣諸島と比べると、とても少ないように思われる。しかし社会科で北方領土問題について学んだことがきっかけで、これはすべての日本人が力をあわせて取り組むべき重要な課題であると考えられるようになった。なぜならば北方領土を取り返すことは、すべての日本人にとって「正義の実現」に他ならないからである。

北方領土は戦争が終わった後に武力侵攻してきたソ連に奪われた。平和に暮らしていた日本人は追い出され、不法に占拠されたのである。こんな理不尽なことがあつていいのだろうか。しかもソ連がロシアになった今でも不法占拠は続いている。私たちは日本人の義務としてこのような悲しい歴史をしっかりと認識し、返還を強く要求しなければならぬ。

それでは北方領土を取り返すために、どのような方法が考えられるだろう。私は一つのアイデアとして、北方領土全域を「世界遺産」に登録してもらおう運動を展開したかどうかを考えている。最近では、富士山が世界遺産に登録されたが、この時の運動の盛り上がりで登録された時の喜びは、日本人全ての感動を呼び覚ましたことを覚えている。北方領土を世界遺産に登録する運動が始ま

れば、日本人の関心は大いに高まり、返還運動の強化につながるはずである。勿論、北方領土には世界遺産に登録されるだけの価値が十分にある。手つかずの美しい自然が豊富に残り、珍しい生き物に満ちあふれているからである。自然遺産に認定してもらおうためには「類例を見ない自然美」「絶滅のおそれがある種を含む、生物の多様性」といった条件があるが、私は十分にクリアしていると考えている。

しかも世界遺産への登録を申請することは、世界中に北方領土問題を広く知らせる効果がある。北方領土は日本固有の領土であること、北方領土がソ連に不法に占拠され、その状態が今でも続いていること、日本はその返還を強く求めていること、この三つの事実を知ってもらうだけでも日本にとって大きな力になるはずである。なぜならば、このことを理解してもらえれば、きっと日本の味方は増えるはずだからである。自然遺産登録の申請先は国際連合の一組織であるユネスコである。これはきわめて平和的かつ公正な組織である。また、私たちが日本固有の領土である北方領土を自然遺産に登録申請することは、きわめて当然のことである。

これは突拍子もない夢物語に過ぎないかもしれない。しかし私たちは効果が期待できるあらゆる取り組みを進めなければならぬ。「北方領土を世界遺産に！」「北方領土を取り返そう！」私は小さな声であっても主張し続けたいと決意している。

佳作

北方領土問題について思うこと

京都市立嵯峨中学校
一年 老家 初果

私が初めて北方領土問題を知ったのは、小学校四年生くらいの頃でした。そのときはまだ何も分からず、「仲良く半分に分ければいいのに。」と、思っていました。こうして私が北方領土問題を知ってから、何年の月日が経っているでしょう。問題解決に向けて、話し合いは進められているようですが、まだ「解決した」とは言えません。

私が北方領土問題を知ったのは小学四年生の頃ですが、実際にこの問題が発生したのは、数年前ではありません。第二次世界大戦の終了直後、ソ連軍によって不法占拠され、日本固有の領土であった北方領土は、現在もロシアの占領下に置かれています。それによって、いまだに昔から住んでいた故郷に帰ることができず、悩んでおられる方も多くいます。この状況が、少しでも解決され、良い方向に向かえるよう、私にできることはないのか。そう考えたものの、直接的に事態を動かすことは、私にはできません。しかし、この北方領土問題に対する「思い」を書き、あらためて自分の意志を確認することならできます。だから、私はこの機会に自分自身の「思い」を書いていこうと思います。

まず、私が一番解決しなければいけないと思う事は、北方領土の元居住者の方々の問題です。自分たちが昔から住んでいた故郷に、突然ソ連軍がやってきて、島から

出ていくことを余儀なくされた方々のことを思うと、胸が痛みます。一日でも早く、「故郷に帰りたいたい」という願いを実現するべきだと思います。

しかし、「実現するべき」と言うのは簡単でも、実際に「実現する」ということは、かなり難しいことです。現在も、平和的な解決に向けて、様々な取組が行われていますが、まだまだ解決への道のりは遠いです。でも、国民が一体となつて返還を要求すれば、いつかロシア政府は振り向いてくれると思います。元々北方領土は日本の領土であると、歴史的に見てもはつきりしています。だから、恐れることはありません。ロシアに向けて、私たちの声を懸命に届けていくことが大切であると思います。

まだ解決は遠いですが、この学習を通して知った様々な運動や取組の成果は、少しではありますが、確実に「解決」というゴールへ進んでいると思います。一日も早く北方領土から人々の笑顔があふれることを願って・

佳作

思いは国境を越えて

大山崎町立大山崎中学校
一年 山田 緑

もともと北方領土に国境はなかった。それを壊したのは北方領土に住んでいた人たちではない。島民は時代の中で翻弄され続けているのだ。

北方領土、つまり択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は、現在、条約上日本固有の領土である。しかし、実態はロシアに不法占拠されている。第二次世界大戦後、ソ連軍は北方領土に侵攻し、占領した。その時ソ連軍は島民から次々と住居を奪い、追い出された人たちは恐ろしく、外にも出られない日々が続いたという。ソ連軍の行動は決して許してはならない事実である。そしてロシアは不法占拠している四島を日本に返還すべきだと思う。

しかし、私はそのことを強く責められる立場ではない。なぜなら、今まで北方領土問題のことをよく理解していなかったからだ。それは多くの日本国民にも言えることだろう。教育現場でものわずかな授業時間しか割り当てられていないとすれば、当たり前かもしれない。

だから、まずは日本国民はこの問題に対して積極的に自らの考えを持つことが必要だ。そしてロシア国民の方々にももつとこの問題を知ってもらい、意見を言い合おう。何も起こらないよりは、それぞれの意見を出し合い、議論が起ころうの方が良いと思うのだ。この問題の解決には、きつと双方の理解と議論が必要である。

とはいえ、一番重要なのは元島民の方々の意思である。元島民の方々に全く罪はない。国同士の争いによって追い出されてしまったのだ。しかし、現在住んでいるロシア人が一方的に悪いわけでもない。もし今、日本に北方領土が返還されるとしたら、そこに住んでいるロシアの人々は追い出されてしまう。安住できる場所がほしいという願いは、どちらの人たちにも共通する思いだろう。だからこそ、領土をただ返還するだけでは不十分なのだ。元島民の方々の「故郷に帰りたい。」という願いも、ロシアの方々の「ここで暮らしたい。」という願いも両方叶えるべきだ。

そこで私はこう考えた。共通する願いには国境など関係ないのでないだろうか。過去のようロシアの人々も日本の人々も一緒に暮らすということはできないか。最初は難しくても、自由に自分の故郷を訪問することができるようにしたり、現島民の方々、元島民の方々の意見を伝え合える場を作っていくことから始めることができる。

しかし、現在の状況では実現は難しいだろう。実現のために私たち国民や国は、北方領土の元島民に小さなことでも協力することが大切だ。その意思が増えれば増えるほどこの考えは夢物語から実現へと進んでいくだろう。ロシアの人々も日本の人々も北方領土で安心して暮らせるようになる、そんな解決を望んでいるはずだ。これは国境を越えて繋がっている思いである。

佳作

「北方領土」に対する私の認識

宮津市立日置中学校
三年 佐瀬 千晶

「北方領土」は、北海道の東にある島々で日本とロシアがそれぞれに自国の領土であると主張している領土だ。小学生の頃は私は、北方領土について何も知らず、ニュースで流れる「北方領土」という言葉を何気なく聞き流していた。中学生になって北方領土について学ぶようになった初めの頃も、あまり身近な問題には思えなかった。京都府北部に住む私は、東北地方以北に行った事が無く、どこか遠く、自分には関係のない問題だと思っていた。しかしいろいろ学習していくうちに、故郷が北方領土にあるのに自由に訪ねる事ができない人や、家族の墓参りにも行けない人の存在を知った。そして「日本人が自由に出入りできるよう取り戻したい」と私の思いが少しずつ変わっていった。

現在、北方領土にはロシア人が居住している。今や、ロシアにも北方領土が故郷である人がいる。ふと一つの考えが頭をよぎった。もし、日本が北方領土を取り戻し、ロシア人を追い出してしまえば、それは無理矢理故郷を奪ってしまう事になる。とすれば、不当ではないのか。日本には、故郷を奪われて、辛く苦しい思いをした人がいる。奪われる痛みを知っている日本が、ロシアに対して同じ事をして良いのか。どうすることが互いにとって良いのか、分からなくなってしまう。

日本とロシア、北方領土を「故郷」とする人々が仲良

く、自由に生活する、つまり「共存する」事は、できないのだろうか。「共存する」とはどういう事か、私なりに考えてみた。それは、互いの違いを尊重し、共有しながら生活する事ではないだろうか。違いを認め、相手を受け入れる。そして、その中で「日本らしさ」と「ロシアらしさ」が失われないよう、大切に守っていく事ができればよいと思う。しかし、言葉にはできても実行する事は難しい。まずは互いを知る事が必要だろう。例えば、現在も行われている「ビザ無し交流」を活発化したり、現住民と旧住民を交えながら、これからそれぞれの国を担っている中学生どうしの交流を北方領土で行ったりするのはどうだろうか。確かに、文化も、歴史・言語も異なる二つの民族が共存する事は難しいかもしれない。その上、政治体制も全く両国では違う。しかし、日本人もロシア人も皆同じ人間だ。互いに歩み寄ろうとすれば、分かり合える部分もきつとあると私は思う。解決に向けて動かさずにいるよりも、何か行動すれば見えてくるもの、変わっていく事もあるのではないだろうか。

北方領土問題は国民の思いだけでなく、経済水域も大きな原因だ。解決に向けて私にできる事はとても少ないかもしれないが、この問題について詳しい情報を知る事、そこから考える事を大切にしていきたい。日本とロシア、双方が納得し、問題を解決できる日が必ず来ると信じて。

佳作

私が考える北方領土問題

京都府立園部高等学校附属中学校
三年 山内 早希

私は、北方領土についてあまり考えたことがありません。場所が遠いということもあり、どこか他人事のように感じてしまいます。そんな私にも北方領土について勉強する機会が与えられたので、自分なりに考えてみました。

かつて北方領土には日本人が住んでいたそうです。でも、第二次世界大戦の後、ロシアの占領状態が続いています。怖い思いをして島から脱出した人もいたそうです。脱出の際、船が沈んで死亡した人もいたと聞きました。元島民の方は、計り知れない苦勞をされてきたので、ふるさとを返してほしいという強い思いがあると思います。

でも、北方領土は日本のものだ、ロシアのものだ、と今のまま主張を続けていても解決しないと思います。解決させるための新しい方法を考えるなどの努力をすべきと考えます。まずは、協力して解決策を見つけられるような関係を築いていくことが大切だと思います。

今、日本でロシアのことがニュースになるのは北方領土問題のことぐらいです。いい関係が築けているとは言えません。以前、仕事でロシアに行ったことのある父から、ロシアのことを聞きました。赤の広場やクレムリンなど観光地のことや、バレエなど文化のことを教えてもらったのですが、ほとんどが初めて知ることでした。そ

して報道されていないことは無いものと思いい、見ようとすれば分かる良さを見ようとしていなかった今までの自分に気付きました。私は、もともとと海外のことを知りたいです。逆に、ロシアの人は、日本のことをどれだけ知っているのでしょうか。最近、日本の文化が海外から注目を集めています。ロシアには日本の文化がどれだけ伝わっているのでしょうか。もし、北方領土問題で関係が良くないために、日本のことがきちんと伝わっていないのなら、すごく残念です。

文化を知るといことは、互いの国が理解し合う上でとても重要であると言えます。互いの国が理解し合うことができれば、複雑な政治の問題も解決につながると思います。だから私は、北方領土問題という狭い視野でとらえるのではなく、文化を知ることと入口に、互いの国を理解するという広い視野でとらえるべきと考えます。互いの国を理解し合うための入口である文化を知るといことは、私たち一人一人ができることです。一人では小さなことだけど、大勢でするととても大きな成果が表れると思います。そして、それがいずれは国と国の間の大きな問題を解決することにつながると思います。私は、少しでも解決の力になれるよう一生懸命に勉強していきたいです。

日本と北方領土

京都府立鳥羽高等学校
一年 由良萌々花

現在、日本は数多くの領土問題を抱えている。その内の一つは北方領土問題である。第二次世界大戦から六十八年たった今なおその問題は続いている。

私は小学校、中学校、高校とこの問題について学んできたがその中で思うことがある。小学校、中学校ではそういった問題がある、ということぐらいしか思わなかったがよく考えると大変な問題である。

領土問題が起こる原因は昔の国にあると思う。しかし、解決しない原因は今の国にあると思う。時は刻々と過ぎていくものであり、国の様子も変化していく。実際に、日本でも江戸と平成はまったく違うものである。こういったことから考えると、やはり今の国に解決策があるのではないかと思う。

では、私が思う「解決を邪魔している原因」は何か述べようと思う。まず一つ目は「関心の無さ」であると思う。特に日本人はそうだ。実際、政治に無関心な人が多く自分たちのトップを決める選挙への投票率も低い。北方領土と言われてもあまりピンと来ないし、自分と直接関係があるものでもない。だからあまり関心がないのだと思う。しかし、このように考えてみるとどうだろうか。もし万が一、領土問題を抱えている国どおしの仲が急に悪化し戦争になってしまったら……。それでも自分に関係ないといえるだろうか。そんなことはありえないと思う

人もいるだろうが、世界の多くの国では起こっているのである。

次に、「知らないことが多い」ことも原因の一つだと思う。私は今、北方領土問題がどこまで解決に向かっているのか知らない。政府は話し合いなどをしていないのだらうけど、ニュースにもあまり出ないし分からない。そういったことも、私たちが関心を持っていない原因のひとつであるように思う。

日本は今、戦争もなく食糧不足に困ることもない、世界の中で考えても、とても平和な国であると思う。しかし最初にも述べたように、今でも数々の問題が残されている。特に北方領土問題を解決するためには、今後政府と国民とが一つになつていかなければならないと思う。そして、日本国民全員が「北方領土は日本の領土である」ことを忘れてはならない、相手の国に流されてはいけないと思う。自分の意見を持って立ち向かえば、北方領土問題は解決できると私は思う。そして、一刻も早く日本に北方領土が返ってくることを願っている。

佳作

現地視察から学んだもの

京都府立須知高等学校
二年 上林 拓未

私は、根室から国後島や水晶島といった島々をこの目で確かめ、あまりの近さに驚きました。間近にせまる北方領土をこの目で見て、二つのことを思いました。北方領土は、三九〇年も前に、日本人により発見された我が国固有の領土です。しかし、第二次世界大戦後、ソ連軍の侵攻を受け、現在ではロシアに不法占拠されています。北方四島は、国際法上も日本の固有の領土であることはまぎれもない事実です。

視察により思ったことの一つは、その北方四島を占拠し続けるロシアが、なぜ国際社会から非難されないかという事です。日本は、昭和二十年八月十五日にポツダム宣言を受け入れ戦争は終結しました。ところが、ソ連軍による北方四島侵攻は八月二十日から始まったのです。日本が、戦争に負けたことに乗じて、北方四島から日本人を追い出し、自国の支配下に置いたのです。それがロシアに引き継がれ、その状況が七十年間も続いています。こうした不法行為に対して国際連合などによる制裁も行われず、国際法と国際正義に照らして不正に思えてなりません。このことは、北方四島が日本の固有の領土であり、ロシアにより不法に占拠されているという事実を、国際社会が正しく認識していないことの証しでもあります。私たち日本人は、声高に主張することを苦手とする国民性ではありませんが、北方領土返還要求の正

当性を、胸を張って国際社会に主張することにより返還に向けた環境が作られます。その意味で、日本人は、国際人となることが求められています。

二つ目に思ったことは、北方四島に関するニュースがあまりにも少ないということです。テレビや新聞では、毎日のように尖閣諸島や竹島のことが大きく報道されていますが、北方四島に関するニュースはほとんど見かけません。このことは、どんな意味を持っているのでしょうか。日本人の意識の奥底に、北方領土は仕方ないというあきらめが潜んでいるのではないかと不安に感じてしまいます。また、国際社会も、この状況をどうとらえるでしょうか。北方領土も、尖閣諸島も、竹島も、いずれも同じく日本固有の領土であるはずですが、私たち日本人は、そのことをしっかりと認識しなければならぬと感じています。

根室を訪れ、さまざまなことを見聞きました。元島民の方も亡くなられる方が多くなり、生々しい体験に基づく話を聞く機会を失われようとしています。また根室では、四島返還の署名活動がいたるところで行われていました。これらの大切な事実を、マスコミの報道により多くの人々に知らせるべきです。これらの情報を通じて、日本国民一人一人が、何が正しく何をなすべきかを、自ら考えることが大切だと感じました。

私は、実際に北方四島を間近に臨み、北方領土問題について認識を新たにしました。これからも返還運動に関わり、両国民が納得のできる平和的な解決を一日も早く実現できるように取り組んでいこうと思いました。

発 行

平成26年（2014年）2月8日

北方領土返還要求京都府民会議

〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議

〒622-0051 京都府南丹市園部町横田3-5-1
南丹市立園部中学校内

